
疾走

猫離脱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

疾走

【著者名】

ZZマーク

Z5589E

【作者名】

猫離脱

【あらすじ】

まったく、どうなつえーくうひつ\$▽ZS。通信不全か。時差がある。

これを書き出したのが4月1日、今はあまり騒がなくなつたが4月馬鹿という日だ。

彼は老婆を犯し男に女として犯されている。

彼はこれまでの人生を詰める鞄を探している。
彼は鈴木夏生といった。夏生は今日休みだつた。彼の望む平穏さが彼の部屋にはあつたが彼はそれに疑問を感じつつあつた。苦心して掘んだはずの平穏は彼のまだ若い人生経験におさまらなかつた。彼は部屋から台所につづる暖簾をいつもとは違う感じでくぐり場所と時間について考えた結果を行動に移していた。見えるのは部屋と部屋を区切る敷居で暖簾が下がつてゐるが実は本当にこの敷居で区切られてゐる境界を越えるために通る道は暖簾の下のきわめて小さな隙間なのではないかと推測した。そこを通ることにより本当の次の場所である台所にたどり着くのではと考えていたのだ。

夏生は旅が好きで遠出することも多かつた。車をつかい夜通しかけて目的地まで走り抜き次の仕事までに帰つてくる。深夜行の電車も苦にならず行き当たりばつたりで機会さえあれば海外へも足をはこんだ。夏生は25歳だつた。彼の頭には旅先で出会つた各地の風景や臭いや季節が自然とすり込まれてゐた。彼は今の倦怠感を乗り越えさえすれば旅の達人の域に達するだろうという考え方勝手に持つていた。だから彼はこうした行動を部屋でとつてゐるのだ。少しばかりの旅から帰つてきたばかりだつた。正確には目的地に着くのを途中で断念し今朝方戻つてきた。少し寝て起きて残りの休日を過ごしていたのだ。

夏生理論日本編では道は似ている。同じように道が通り脇に店ができ川が流れ橋が架かり集落があり桜が咲いてゐる。それはなにかの本で見つけた訳でなく百聞は一見に如かずのたまものだつた。しかしこれしきことは何とか学の範囲内で大学なんかで教えられてい

るのだろう。夏生はそういう学問というか大学に対し劣等感からの反骨心をもっていた。単に入学試験に落ちていたからにすぎなかつたが、夏生はそこへの移動がかなわなかつたと最近考へるようになつていて。仕事をするようになり自由に使えるお金が増え、休みを利用して旅を続けた。どこへでも行けるし、行つてきたつもりだつたがどうもそれだけではないような気がしてた。これは今の夏生の課題だつた。

旅の本質は置いておいて、本当の意味での移動とはたどり着くとはどういう事かを夏生は探ろうとしていた。今朝戻つてきたのは何となく気乗りしないこともあるがそこを考えながらの事だつた。そのまま進んでいれば間違ひなくたどり着いたであろう場所に今夏生はない。そこにたどり着いていないからそこは景色は夏生にはない。そこにたどり着いて景色を納め戻つてくる。たどり着いたことの満足感と望んだ景色を頭の引き出しから自由に引きだす権利を手にする。それが今はない。

彼は台所を突つ切りトイレのドアを開け閉め開け台所を突つ切り部屋に戻りベッドに寝こころんだ。

訪れ ロシア編

ロシア正教がなにかしらない。その絵がまさに気持ち悪いのだ。日本漫画で育つた世代としては耐え難く、その冊子を受け取る気にはならなかつた。

二人一組で布教をしているのか、スースとも船乗りの制服ともしれない同じ服装をしてマウンテンバイク型の自転車にのりしつかりヘルメットを着用している。

まずはそれらを脱いで一度教会へ訪れてみませんかと誘われる。

この人たちは何を言つてゐるのか、夏生は思い、茶すり出すことを思いつかなかつた。

内密な商談をしている氣にすらなつた。

ウラジミール、セルゲイ、イワン、ストラーチェンコ、頭に浮かぶロシア的名称をあげておいたが彼らは名のらなかつた。それはそれでいい。これぞロシア的か、そうに違いない。

毎週月曜日のおとない、決まって夜の七時半からの時間帯。夏生は断らなかつた。といつても、何らかの強い勧誘を受けたわけではなかつた。ただの訪問で何か売りつけられるわけでもなく洗脳されている気もしなかつた。互いも事について少しの世間話もするし、最近あつたことなど1週間に一度だけだし氣にも留めなかつた。

しいてあげれば茶をだすようになつたくらいものか。

何週目かになつて、2人組が1人になつた。一人のうち小さい方だけがあつ月曜にいつもどおりの時間に来て夏生は言つた。

「あれ、もうひとりは」

セルゲイは帰つたというのだった。

大きな方はセルゲイといい、ロシアで事業家の父が会社だか事業所だかを移転するにあたつて引っ越しをするのでもういられなくなつたような云々かんぬんの説明を受けた。

スルトというもう一人はセルゲイと一緒に日本にやつてきていたが彼は母国にまだ帰りたくないという。

日本が好きなのと夏生は聞いたが、スルトはわからないと答えた。とりあえず日本語はうまいし、何とかなるんじゃないのかと人々とのように感じていた。

それから彼スルトはやはり毎週訪れるのだが、聖書やらなにやらの本やパンフ等はいつさいもつてこなくなつた。

最初は数十分からやがて30分、1時間といつようになり。夏生は話し相手がいなくなりさびしんだりとおもい、スルトのするまことに任せていた。はじめから遠慮という気持ちは礼儀からかなにからかはしらないが持ち合わせているらしく、それがなくならぬいかぎ

りは悪くはないだろうと夏生はおもい接していた。

毎週月曜日はロシアデイ、夏生の中ではそう決まりつつあった。

彼はテレビを見ない。新聞もよまらず、本も雑誌も読まなかつた。音楽も特に聴かず。静かなのを好んだ。時に暗闇を、ときに太陽を集中して浴びたりした。

昔、病院に入院したことがあつた。暇だらうとか、寝られますかとかたずねられるのだが、そんな事はなかつた。食事も文句はない。なんにたいしてもなぜか文句などなかつた。

ただ、そつあるだけ。ただ、そつなのだろうと感じていた。

4人部屋の周りはお年寄りで、前の若干若い入院患者が退院するときには老人の食事後のお膳をかたづけてやつてているのを彼は自分の仕事とした。後は少し話しかけられたら答え、老人の家族らが来たときも愛想よくするだけだつた。

思つたほど、苦痛ではなかつた。

寝て、起きて、食事をして、検査をし、その時はテレビを見、本を読み、雑誌をみた。音楽も携帯から取り入れた。そのせいかもしれない、今このときがあるのは、そのときはむさぼつた。時間はあるし一人になれるし。その反動か。

年寄りの朝は早く、かちやかちや朝食の箸の準備をして決められた時間にお膳が遅れると機嫌が悪かつた。ばくばく食欲旺盛。そのくせご飯に文句を言つ。寝る。屁をこく。いびきをかく。彼は觀察をしていた。家族や親類、友人近所の人たちが見舞いに来る。ときにはどこかの姪っ子だかい年をしたおばさんとはハグして励まし合つていた。

とにかくとにかくだった。

彼の方にも友人が何人かきて、本やら雑誌、水等を持ってきた。職場の上司が来たときはなぜか冷や汗をかいた。ジャージを着て寝

つ転がつてテレビを見ている姿はただの親父に近い。彼はそのときテレビを見ていたのではなく、代わり映えしない窓の外を見て考え事をしていたのだ。そういう自分の時が打ち破られた瞬間だつた。あるだろうが、想定していない、病人として油断というか当然の権利ともいえた。彼は彼に話しかけていた。

この病院は風水的に四神相応ではないのか。さすが病院といわれるだけのことはある。地方都市の敷地面積を有効に使い、各地から集まつてくる人数は何万人だろうか。入院患者も部屋の数部屋の番号からいけば何千人。働いている人は、看護師は医師はどれくらい。売店のお姉さんは何日交代か、自動販売機の数。ともかく、別な世界に旅行にきた感じだつた。幸いこれまで健康で病院には縁がなく過ごしてきた彼には真新しさが毎日だつた。

東に青龍。これはあの線路と道路だな。電車が走り車が列をなしでいる。特に貨物列車が通るさまはまさにそれだ。南はあの山。孤峰。でこの地方で何とか富士といわれる山だ。天気のいい日は頂上までよく見える。鮮やかで優雅なさまはまさに朱雀。

さあ、あと二神。この部屋からは東南しか眺めない。明日から調査に出かけよう。時間はある。注射の後だけが黄色く濁り外は晴れ渡り真っ白な壁、薄紅色のカーテン、病院の臭い。文句があるとすればこの臭い。病院の臭い。注射。検査。元気なお年寄り。死にそうな患者。その中の自分はふわふわしていてあきらかに異質だつた。

スルト、なんでオレンんとこに来たの。唐突に訪ねてみた。月曜日の8時半頃だつた。

答えないでいるから、ほんとに最初の時のこと、セルゲイとスルト一緒に来たでしょ。その最初の時のこと。ここら辺のことを聞いた。それともオレのことつけてたりした。そこら辺のことを聞いた。

スルトは言つた。夏生さん覚えてないですか。昔スーパーのレジで助けてくれました。そのときうれしかつた。お礼いいたかつたけどいなくなつた。後から、またそのスーパーで見つけてアパート知つ

た。すみません。

別にあやまることではないが、そんなことあったか夏生は思い出せなかつた。そん時もスルトだつたと聞くとはいと答えた。スルトは確かにセルゲイと比べると日本人っぽい。たぶん自分は何も気づかず言葉も聞かずに顔も見ずに何かしたのだろう。

そういうばレジで財布を出して数えるような返品するようなもたもたしたことがあつたかもしない。列が長くなりかけていて誰もが困つてしまいそうになりかけの瞬間に自分がなにか余計な事かもしけないが気の利いた風な事をしたような気がした。

そうかあんときがスルトだつたのか。夏生は少し懐かしんでみた。スルトは恐縮していた。まるで日本人のようだ。

まあ、今日はスルトの就職祝いだ。あまりいろいろ聞くのもなんだしふーるでいいかと聞くといいらしいのでそれで乾杯した。

スルトは貧しくて日本に来て家に送金してだからセルゲイと帰らずここにいるんだろうなんて考えてやめた。

まあいい。今日は月曜日だし。スルトは來たし。迷惑ではない。夏生は何を話すわけでもなくなるまでスルトと時間をすごしスルトは帰つて行つた。

スルトが時を思い出させてくれる。時間を月曜日を。夜の七時を。うらうらと部屋を一人彷徨い夏生は風呂を沸かしその水をずっと見ていた。ビールの缶を片手にもう一つの腕がしびれるまでほほをつきお湯があふれて止めた。

アパートにこの部屋に人が集まつてくると思うのはまだ早すぎるとも思つたが、そう思つてしまつた認識があつた。

スルトは夏生の中で完全に良いやつだった。それは計算がたつからでもあつた。必ず月曜日だけ決められた時間に来る。それは夏生はまったく望んでいた。そのスルトが来た次の日だとすれば火曜日だ。

火曜日の女。出会いは火曜日だ。それは重要なのかしれず、なんだか心に残つた。

それはそうだ。もう一つ連想させるものが夏生にはあつたのだ。火だ。そう火だ。最初に火ありますかと聞かれたのだ。火曜日は後付だ。そう火だ火があるかと新手のナンパかと思つた。残念ながらないというとじやあタバコもないでしょと言うのだった。ない。と答えたがそうか。うん。といい、ねえときりだした。それが篠崎楓と言ふ女だった。

そのときは周りにしゃがませた男を囲ませて、でも男らはなぜか怖そうでもなんともなく女も普通っぽいのだった。何をしているのかしゃがんで集まる場所でもなくただの道ばた。お腹が痛い女を介抱している同級生といった感じ。じっさい、男らは学生服。高校生かなにかか、女もそうか。でもそのときの楓の服装が思い出せない。セーラー服でもないし、そなだつたら完全に学生と思うし、そう思つてないとすれば私服だが、まずもつてわからない。で、次の日は楓は一人で同じ場所に立つていた。それは水曜日だった。

恋したあこがれの先輩にいよいよ振られ、進路のことで親や先生ともめて、友達もなくあてがない女なのだろうと夏生はみてとつた。楓が電線に止まりまたいつ飛び立つだらうくらいの目線で楓を見ていた。

水曜日だった。部屋を綺麗に掃除してくれたというか、何か暇といふので掃除をさせた。いろいろいいながら楽しんでいる風にみえた。おままでした。その内料理もつくりだした。楓は楽しいだろうということはわかつた。

この街は終わるよ。街を活かそうとしそぎて人を活かしてない。楓はここがこの街が日本が嫌いというのだった。それに対して夏生はそう答えた。

でも、いいよ。自分は嫌いじゃないんだ。終わるのはわかるそのまま終わらせて欲しい。自分が嫌いなのはそなはならないことが嫌いなところかなと夏生は答えた。

かわんないと楓は言うので話を変えていろいろ旅行の話をしてやつたらそれはそれで結構乗ってきた。日本は嫌いなはずなのに。もつたらないと夏生は思った。自分もこうだったのかを振り返った。今では夏生は自分が日本だと思うようになった。自分がどこか歴史の一部分をなぞっているだけの気がするのだった。鎮国する日本、開国を迫る外国。戦争に負けてメリケンの統治下に置かれている。メディアはアメリカそのもの。訳もなく一人夜道を歩けば誰もなく、物音がするとおびえそそくさと後ろを振り返らず逃げてゆく。魑魅魍魎のなんたるかも知らず、ただただそれは己でないか、あるいは猫のせいにするのか。自分は日本ではなくマクロ的だかミクロ的だか、八百万の神になるのだ。日本そのものではなく、そこに住まう神になるのだと夏生は思つた。楓は自分を嫌いだという。夏生はそうではない、しかし自分もそう思いたいのだ。だから日本をそのままにしてほしい。終わるのだから。それはいいのだと思つ。ほんとにそつかと誰かが聞くとすればやはり自分しかないのだが、今はそれがいよいよに感じる。満足しているのだから。

アクション起こすとすれば起きるのか起こすのか、朝が来るのか来てしまうのか。

楓は割に美人でそれは僥倖以外の何者でもなかつた。
あなたはなにをしてるんですか。わすれてしましました。いまどこにいてだれとなにをしているんだろう。1分2分10分30分時を数えやがて過ぎていく。

うまいやり方一日のぐぐり24時間で一周。それでいて時は進んでいく。どこかにどつちに。それは一周は積み重なつているのか、捨てられるだけなのか。どつかはどつちでそのゴミがそこにまつているのか。

一瞬で目が覚めるそのときからその瞬間に今までの時間が廻転してゼンマイのように反発して目が覚めた後の活動を支える。
休みの日になると夏生は考えて眠る。眠るとは起きながらにして眠る。

る。

休みの日に楓が来るのははじめてだった。

なんて説明しようか。言い訳か。

なにかが始まらないところにいると思いこんでいる楓は有無を言わさずになにかがはじまっている朝に機嫌が悪かった。

毒をだしてしまった。はきだす。夏生はそれをやつてきた。まだ足りない。まだ足りない。夏生は眠っている。いざれどいちかだ。いざれそなるようになるのを前倒して、起きると暁だった。楓は朝か昼か夜かぼんやりしていた。

コーヒーでも飲む。と楓にいわれて、夏生はまだ暁だと感じた。

隠している紅茶緑茶やらいずれ気づくのだろう。楓に変わつて欲しくなかつた。ここにどつぱりつかつてやがて気づく。それしかないと、底がつかば終わりなのだと。巻いて巻いてその巻きが最後まで持たないだろう。それは夏生専用で楓のはまた別にあるはずなのだ。だが一人分の底が二人分だとすると夏生も考へないではなかつた。こういうところの細かい計算はできないが判断はできる。負荷の容量や数式はしらないうが保たなくなるのを黙つてながめているほど老いてはいなかつた。まずは楓の巻きに乗る。ロシアとの取引。当面浮かぶのはそれだ。持ちうる最初の最善の策を尽くす。理想がどうのこうの、計算がもくろみがと言つていても特急は進んでいくのだ。

細かい計算はできないが細部に気が回りその細部が全体を崩していくことを知つていて詳細な設計のないままに補修する。気が小さいのか大きいのか、夏生は自己分析する。

細部の計算をしていたのでは間に合わない。細部の補修を怠ることを起因とした崩壊を解つていて止められないは耐え難い。どつちつかずといえばそうともいえる。半端。しかしこれが自分で自分にできることがあるのすべて。常にそうだ。今、自分にできることのすべてをやるんだ。

夏生は天才だと思つ。自分自身の天才。自分の為の天才。そういう

とにかく気がつかないわけではなかつた。

役所に行って住民票を取つてきた。携帯電話を新規購入した。

楓は自動車学校の卒検を無事終えた。

スルトは丁寧な日本語を話した。

電話番がスルト、運転手が楓。そのどちらもサポートしその他もうろを夏生がこなす。

パソコンと携帯のホームページをつくつた。

カリギュラがよいかツアーリがよいかもめた。

一番の問題が人員の確保だつた。

広告を出して何とか4人を確保してその友達の友達とやらを補欠で登録した。

夏生は近所の空き地をいくらでも知つていた。車検を1年度に控えた白の新車を売却して中古の軽ワゴンをそろえた。色は黒にしたがつたが楓はブルーメタリックを選んだ。同じ色同じ車種一台だ。これは兄弟といい。私がいずれ名前を付けるとうれしそうだつた。

スルトは週一でなくほぼ毎日顔を合わせるようになつた。携帯を渡した。スルトは張り切つていた。練習だと言つて何度も電話をかけてくる。楓にはメールだ。

夏生が心配していたのが楓だつた。親とかは何も言わないのとつたが、大丈夫と答えた。

その答えは夏生を納得させなかつた。それはよくある大丈夫じゃない練習だと夏生はいつた。私、専門学校いくし、それで親は納得したと言つた。

そうかそれは良かつたと夏生は言つた。

ねーどーするお父さん車買つてくれるつて買つちゃ おつかー。

楓は言つ。専門学校つてどんなと夏生が聞くとお菓子の専門学校と言つ。

夏生は免許書のコピーと入学証明書を楓から預かつた。

試しに履歴書も書かせてみた。

学校で私もスカウトするねーと楓ははしゃぎ、お客様も取つてこよつ
かそういうのつて営業つて言つんでしょうと生意気なことも言つ。
まあいいか。夏生は思う。

薄い縞のステッツをきて衿をはだけてとんがり革靴をはいてお腹は出
ていなかつた。

10時10分 ソヨ子

11時11分 あやか

名刺は自信作で夏生は営業部長の肩書きだつた。

途中スルトから電話が入りいまい具合に忙しさと箇のついた話しぶ
りをアピールできた。

二人とも時間に遅れなかつた。夏生はそれをメモした。簡単な誓約
書を書かせた。写真を撮つた。

この一人は本命だつた。明日からでも今日からでもものになる。

0時0分 はるか

1時1分 きょうこ

ホームページを更新した。

どれくらい稼げるかきょうこは切実だつた。
はるかはほんやりしていた。

一ヶ月くらいがあつといつ間に過ぎ去つた。

何も問題は起きそになかつた。始めることが問題でそれを解決す
るのが仕事で段取りも準備も怠らなかつた。部相応にしていてそれ
は機動に乗つた。あとはそれを堅実にどれだけ続けていくか、そし
てその次はについては一足飛びに次のメニューを組んでおくのだ。
ある程度展開させたら最初に戻してもいい。夏生は解つていた。

夜を巡る街があつた。朝日とともに帰つてきて昨日の蝙蝠の死骸
が同じところにあつた。

朝日は鼻がむずかゆくなるだけでもぶしくはなかつた。

朝日を浴びながらの交配が寿命を延ばす人々の迷信を楓にしようとしたがやめた。それくらいだった。こつこつと小銭が貯まつていつた。無理はしなかった。第一段階、続けること。スルトはお金が入つても一見変わらないようだった。信仰のせいか母国への仕送りの為か無自覚なのか、よい兆候だった。

楓は学校にちゃんととかよつていた。

そんなことは夏生には関係ないのかもしない。親みたいといわれそうだ。

まさに好きな人とかできたかとか聞きそうだ。まあ親でも言わないうそだ。

なんでなんで、なんで抱いてくれないのか。

それはなぜだらうか。夏生は答えを考えた。聞かれればでてくるのだろうがそれはあまりにギャンブル性を伴い夏生はそれに弱いことを自覺していた。大事なことを自分の負けることに賭したくない。スルトはタルコフスキーについて語り夏生はDVD集全巻を借りて眠りの幻術にした。

楓のタルタルソースは絶品で生の人参をたくさん食べた。

眠つて食べて仕事をして、繰り返しだった。

夏生は順調に仕上げた。時々あえての間違いを犯すことも悪くはないと気づき始めた。

夏生は根が生えてこなかつた。これではないと知っていた。またここでもないのだ。

何が原因かはわかっているのにだ。夏生はぐうのねもでなかつた。もう充分だ。

これを誰に話そう。

季節は美しく風を心地よく闇もやわらかく朝日は細雨でコオロギが鳴つた。

ふつと我に返るとまだここにいた。

それで問題は何だ。それは問題ではない。ここをこつする。今はこれでいい、このまま。

あれはもう辞めよ。 それ。 そのとつ。 いや、 続けよ。

時々がちやがちやなことしたくなつて裸で車に乗り込む。午前1時から4時までそれで仕事をこなした。のろまなカタツムリはそれでも起きてきて亀のようにウサギにかとうとしていた。車から降りるタイミングを失つて、楓に服を持ってきてもらったのが。午前7時。楓の運転で本業を辞めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5589e/>

疾走

2010年12月28日05時38分発行